

「大鏡」 ver.2

Made
by
HiBiKi

△成立▽

平安時代後期

△特徴▽

○紀伝体で叙述された歴史物語

※紀伝体：個人の伝記を重ねて歴史を叙述する方法

○語り手の百九十歳の大宅世継と、聞き手の百八十歳の夏山繁樹の思ひ出話や見聞を通じて話が進む

○序段で「藤原道長の栄華が何故生まれたかを解き明かす」という作品の目的が語られる

○『今鏡』『水鏡』『増鏡』と続く鏡物の祖

(すべてあわせて「四鏡」という)

△作中人物▽

○入道殿：藤原道長。

○大納言殿：藤原公任。「和漢朗詠集」を撰集した。

動詞

赤文字

動詞 (尊敬)

赤文字

動詞 (謙譲)

青文字

動詞 (丁寧)

黄文字

助動詞

緑文字

形容詞

黄文字

形容動詞

紫文字

助詞

青文字

その他の品詞

橙文字

三舟の才

尊敬：動作の主語に対して使う

謙譲：動作の受け手に対して使う

ある年

格助△主格▽

ひととせ、入道殿の、大井川に逍遙せ

ある年、入道殿が大井川で舟遊びをし

尊敬・連用

させ

尊敬・補過去・連体格助△時▽

給ひ

しに、

作文の舟・管弦の舟・和

なされた時に、漢詩文の船、音楽の船、和

歌の舟と分タ行四段・未然かた尊敬・連用せ尊敬・補て、その道にたへ優れる
歌の船とお分けになつて、その道に優れて

存続・連体
たる人々を乗サ行下二・未然せ尊敬・連用させ尊敬へ語り手↓入道給ひ補助過去・連体し
いる人々をお乗せになつた

格助へ主格へ謙讓へ語り手↓入道へ
に、この大納言の参り
が、この大納言殿が参上しなやつ

完了・連体接助へ順確へ
るを、入道殿、「かの大納言、いづれの舟
たので、入道殿が、「あの大納言は、どの舟

係助ラ行四段・未然尊敬・終止推量・連体（係結）
にか乗らるべき。「とのたまはすれ
にお乗りになるだろうか。」とおっしゃる

接助へ順確・偶然へ
ば、「和歌の舟に乗り侍らむ。
と、「和歌の舟に乗りましょう。」

尊敬へ語り手↓大納言へ
とのたまひて、よみ給へるぞ
とおっしゃって、（その舟で）お詠みになつたもの

終助詞〈念押し〉

かし、

ですよ、

格助〈主格〉ク活用・已然接助〈順確〉

小倉山嵐の風の寒ければ

小倉山の嵐の風が寒いので

力行上一段・未然打消・連体

係助ク活用・連体（係結）

紅葉の錦着ぬ人ぞなき

紅葉の錦を着ない人はいない

謙讓〈語り手〉入道

申し受け

尊敬〈語り手〉大納言完了・連体

給へ

るかひありて、

お願いして受けなされたかひがあつて、

尊敬〈語り手〉大納言

完了・終止終助〈詠嘆〉

大納言

あそばし

たりな。

御みづからも

（すばらしい）歌をお詠みになったことと、（大納言）ご自身も

尊敬〈語り手〉大納言伝聞・連体

のたまふ

なるは、「作文のに

ぞ乗る

格助〈対象〉係助〈強意〉ラ行四段・終止

おっしゃるとか言うところでは、「漢詩文の舟に乗る

適当・連用詠嘆・連体

そうして

これくらい

漢詩

べかりける。さて、かばかりの詩をつくり

ほうがよかったなあ。そうして、これほどの漢詩を作

完了・未然 反実仮想・未然接助〈順仮〉

格助〈主格〉

婉曲・連体

たらましかば、名の上がらむことも
ったのだったら、（私の）名声が上がるようなことも

強意・未然 反実仮想・終止

シク活用・連用 詠嘆・連体

まさりなまし。くちをしかりけるわざ
きつとまさっていただろうに。残念なことをしてしまっ

終助〈詠嘆〉

それにしても

入道格助〈主格〉

係助〈疑問〉

かな。さても、殿の、『いづれにかと
たことよ。それにしても、殿が、『どの舟に（乗ろう）と

八行四段・終止

尊敬〈大納言↓入道〉過去・連体

係助〈強意〉

思ふ。』とのたまはせしになむ、我なが
思ふか。』とおっしゃったのには、我なが

サ変・未然自発・連用 過去・連体

尊敬〈語り手↓大納言〉

ら心おごりせられし。』とのたまふ
ら自然と得意になった。』とおっしゃるとかい

伝聞・連体（余韻）

ラ行下二・連体副助〈類推〉

接助〈逆接〉

なる。一事のすぐるだにあるに、か
ことだ。一道が秀でることさえ大したことなのに、この

尊敬〈語り手↓大納言〉過去伝聞・連体

くいづれの道も抜け出で
ように諸道が群を抜いていらっしやるというのは、

給ひけむは、

いにしへも
侍らぬことなり。
丁寧へ語り手↓聞き手へ
打消・連体
断定・終止

昔もないことです。

だに
― 副助詞へ類推

和歌だけでも難しいのに、公任は複数の分野で優れている。